

健康 コラム

超高齢社会の背景で 顕在化する認知症問題



秋田厚生医療センター
認知症看護認定看護師 佐々木 蘭 看護師

内閣府の統計によるデータによると、平成29年度の高齢化率(総人口における65歳以上の高齢者割合)が27.7%に達しており、世界的にも最も高い水準にあります。一方、秋田県の平成29年度の高齢化率は35.6%となっており、今後も増加する状況にあります。高齢化に伴い認知症の有病率も増加傾向にあり、認知症はもはや他人事ではなく私達の生活において「在って当たり前」といえる身近な疾患といえるということは以前もお伝えした通りです。自分の身近な存在である親類や近所の方で認知症問題を抱える人は少なからず存在するのではないのでしょうか？

認知症になったらどうしたらいいの？

家事や着替え、お金の支払いや交通機関の利用など今まで出来ていたことが出来なくなり医療機関を受診した結果「認知症」と言われたが、どう生活が続けていっていいのかわからない。そんな悩みを抱える患者さんやご家族の方は多いと思います。社会資源の利用を考えていくことも重要なことですが、まず「認知症」だから「何も出来ない」という先入観を持たないことが大切です。

認知症だから何も出来ない、わけではない

認知症の主な症状として「記憶障害」や物事の段取りができなくなる「実行機能障害」、季節の感覚や場所の見当がつかない「見当識障害」、機能的な障害がないのに言葉が理解できず出てこない、物が認識できない、服を着るなどの動作ができないなどの「失語」「失認」「失行」があります。しかし、認知症の原因疾患は多種多様であり、一口に認知症といっても侵される脳の部分によって症状の現れ方や重症度には大きな差がみられます。また、日常生活動作が自立されている場合には、身についた動作については長く保持されていることが多く、料理という一連の動作を計画的に出来なくても「洗う」「切る」「煮る」など部分的な動作に関しては問題なく行うことが出来る場合があります。さらに、記憶障害が軽度で文字の理解が可能であれば目に入るところに注意書きを掲示しておくことで次にやるべきことや既に終えたことの確認を自分で行うことが可能です。必ずしも「認知症」「何も出来ない」という方程式が成り立つわけではないのです。体は不自由なく動く

のに「あなたには無理だから」と自分の役割を全て他者に奪われてしまっただろうでしょうか？悲しくなったり、不信感を抱いたり、強い怒りを感じるかもしれません。認知症の方は記憶障害などから「自分が病気でいる」という意識が欠如しており、この思いは人一倍強いと思われれます。そんな本人の気持ちに辛抱強く寄り添い、少しでも出来る部分を見つけて援助することで達成感や満足感を得られ、落ち着いて過ごされることにも繋がります。多くの方が認知症の進行を少しでも遅らせられるよう住み慣れた環境の下での生活を続けられるためにも、個人の問題とせず地域全体で支えていきましょう。

